

愛知県立大学

教員の自己点検・自己評価

－ 自己点検・自己評価報告書 －



2016年度

は し が き

愛知県立大学学長 高島忠義

現在の大学教員は、その本来的使命である教育研究だけでなく、その成果を社会に還元する「大学の第3の使命」としての社会貢献（中教審「我が国の高等教育の将来像」、学校教育法83条2項）、さらに近年は全学的な教学マネジメント（中教審大学教育部会審議まとめ「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」）まで、極めて広汎な営為を求められています。

そして、大学には、教員が上記の職務を果たしているかどうかについて自己点検・自己評価を実施し、それを公表することによって社会に対する説明責任を果たす責務が科されています（中教審「我が国の高等教育の将来像」）。当初、この自己点検・自己評価は、大学の努力義務にとどまっていたのですが、平成11年に法的義務化されるに至りました（学校教育法109条）。その後、当該制度は、従来の取り組みを、今後もより一層「充実・深化」させることを要請されています（中教審「学士課程教育の構築に向けて」）。

こうした状況の中、本学は、公立大学として、教員の公的な活動について広く県民に公開する責任があると思料し、かなり早い段階から各教員の「自己点検・自己評価報告書」を作成・公表してきました。また、教育研究審議会に附置された評価委員会は、自己点検・自己評価の項目や方法を絶えず検証し、報告書がより一層有意な内容のものとなるように努力しております。その結果、平成23年度に実施された大学評価・学位授与機構の認証評価では、毎年「自己点検・自己評価書」を継続的に作成・公表していることが、本学の「優れた点」の1つとして評価されました。また、この認証評価と同時に選択的事項として同機構から評価を受けた「研究活動の状況」に関しても、本学が自己点検・自己評価を実施し、その結果を公表している点が高く評価されています。

近年は、周知のように、日本の大学が十分な高い質を保証しているかどうかについて「大いに問題がある」とされ、高等教育機関としての「質の保証」を強く求められています（中教審「我が国の高等教育の将来像」）。この点は、平成24年の中教審大学教育部会の上記まとめや中教審の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」でも繰り返し指摘されています。本学としては、こうした批判や指摘に十分対応できるよう、今後とも教員自身による厳格な自己点検・自己評価を基礎とした、自主・自律的なPDCAサイクルを実施していく必要があると考えています。

愛知県立大学

教員の自己点検・自己評価

2016年度自己点検・自己評価報告書

目 次

愛知県立大学概要

第1章 自己点検・自己評価の様式.....	1
1. 1 自己点検・自己評価項目.....	1
1. 2 目標と自己評価.....	2
第2章 自己点検・自己評価結果の概要.....	5
第3章 教員の自己点検・自己評価データ.....	15
3. 1 外国語学部.....	15
英米学科.....	17
ヨーロッパ学科.....	61
フランス語圏専攻.....	61
スペイン語圏専攻.....	83
ドイツ語圏専攻.....	105
中国学科.....	127
国際関係学科.....	151
3. 2 日本文化学部.....	181
国語国文学科.....	183
歴史文化学科.....	203
3. 3 教育福祉学部.....	221
教育発達学科.....	223
社会福祉学科.....	255
3. 4 看護学部.....	283
看護学科.....	285
3. 5 情報科学部.....	391
情報科学科.....	393
3. 6 入試・学生支援センター.....	455
国際交流室.....	457
3. 7 教養教育センター.....	461
教養教育センター.....	463
おわりに.....	473

愛知県立大学概要

愛知県立大学は、1947年、愛知県立女子専門学校として創設されて以来、1966年の共学・4年制愛知県立大学の創立と外国語学部の開設をへて、1998年に長久手町に移転し、その際、情報科学部および文学部・外国語学部における3学科を新設し、昼夜開講制の全面実施、大学院国際文化研究科の設置を行ってきた。また、2002年には情報科学研究科を開設した。

一方、愛知県立看護大学は、1968年に愛知県立看護短期大学として創設されて以来、1995年に4年制の大学として開学し、1999年に大学院看護学研究科看護学専攻修士課程を、また、2003年に看護学部助産師コースを設置し、2007年に大学院修士課程に専門看護師コース、2008年に看護実践センターに認定看護師教育課程（がん化学療法看護、がん性疼痛看護）を設置してきた。

新しい愛知県立大学は、2009年、「良質の研究に基づく良質の教育」をモットーとし、また、母体となったふたつの大学の良き伝統を継承しつつ、文系、理系双方の学部を擁する複合大学としてスタートした。外国語学部、日本文化学部、教育福祉学部と情報科学部をおく「長久手キャンパス」と看護学部をおく「守山キャンパス」を有する新愛知県立大学は、本年度に至るまで愛知県域におけるその時々の高等教育のニーズに呼応した教育・研究活動を展開してきている。

・学部・研究科・附置研究所等の構成

(学部)	外国語学部（英米学科、ヨーロッパ学科、中国学科、国際関係学科） 日本文化学部（国語国文学科、歴史文化学科） 教育福祉学部（教育発達学科、社会福祉学科） 看護学部（看護学科） 情報科学部（情報科学科）
(研究科)	国際文化研究科 人間発達学研究科 看護学研究科 情報科学研究科
(関連組織)	入試・学生支援センター 教育支援センター 教養教育センター 学術研究情報センター 地域連携センター 看護実践センター
(研究所)	多文化共生研究所 通訳翻訳研究所 文字文化財研究所 生涯発達研究所 情報科学共同研究所 次世代ロボット研究所
(関連施設)	大学附属図書館 講堂・学術文化交流センター

・ 学生総数及び教職員総数（平成28年5月1日時点）

(学生総数)：学部 3,299名、大学院 226名

(教員総数)：212名

(教員以外の職員総数)：97名（職員37、派遣職員9、契約職員51）

第1章 自己点検・自己評価の様式

1. 1 自己点検・自己評価項目

平成26年度～平成28年度の3カ年の実績等を基にして、以下の項目について本年度の目標・計画に対する自己評価を行った。

I 研究活動 (ウェイト %)

- 研究課題
- 学界動向と研究課題の関係
- 目標・計画
- 過去3年間の研究業績(特許なども含む)
- 科学研究費補助金等への申請状況、交付状況等(学内外)
- 自己評価

II 教育活動 (ウェイト %)

- 目標・計画
- 専門教育科目(講義・演習)
- 一般教育科目(講義・演習)
- 大学院授業科目
- 論文指導・研究指導
- 自己評価

III 大学運営 (ウェイト %)

- 目標・計画
- 学内委員など
- 自己評価

IV 社会貢献 (ウェイト %)

- 目標・計画
- 学会活動など
- 地域連携・地域貢献など
- 自己評価

V その他の特記事項(学外研究、受賞歴、国際学術交流など)

VI 総括

1. 2 目標と自己評価

本年度も前年度の書式を継承し、年度はじめに目標・計画を記入し、報告書作成時に同一シートに結果と自己評価を追記する方法とした。また、自己評価について、3通りの文言のいずれかでまとめることにより客観性を持たせた。十分でない場合は必要に応じて改善策を記入することとした。以下に自己評価の項目を示す。

<目標・計画、ウェイト>

年度はじめに目標・計画およびウェイト（合計が100%）を記入し、委員に提出する。

<自己評価>

研究活動、教育活動の自己評価では、理由を記すとともに最後は下記のいずれかの文言でまとめ、「あまり達成できなかった」の場合は、その後に改善策を書くこと。「おおむね達成した」の場合は、改善策があれば書くこと。

- ・目標を十分達成した。
- ・おおむね目標を達成した。
- ・目標をあまり達成できなかった。

大学運営の自己評価では、理由を記すとともに、下記のいずれかの文言でまとめ、「あまり貢献できなかった」の場合は、その後に改善策を書くこと。「おおむね貢献した」の場合は、改善策があれば書くこと。

- ・大学運営に十分貢献した。
- ・大学運営におおむね貢献した。
- ・大学運営にあまり貢献できなかった。

社会貢献の自己評価では、理由を記すとともに、下記のいずれかの文言でまとめ、「あまり貢献できなかった」の場合は、その後に改善策を書くこと。「おおむね貢献した」の場合は、改善策があれば書くこと。

- ・社会に十分貢献した。
- ・社会におおむね貢献した。
- ・社会にあまり貢献できなかった。

<総括>

総括では、特筆すべき点や改善点があれば記すとともに全体の総括を行うこと。

自己点検自己評価の妥当性を高めるため、昨年度に引き続き、以下の項目について本人以外（各学部で選出）の複数名体制で形式面のチェックをし、満足しない場合は修正を依頼した。

- **目標・計画**
 - ・目標が記述してあるか
 - ・目標に対して具体的な計画が記述してあるか
- **研究業績、教育業績、学内委員、学会活動、社会貢献など**
 - ・具体的に記述してあるか
- **自己評価**
 - ・目標・計画の達成度等を含め、実績を基に自己評価されているか
 - ・「十分貢献達成した」、「おおむね貢献達成した」、「あまり貢献達成できなかった」のいずれかでまとめられているか
 - ・「あまり貢献達成できなかった」の場合は、その後に改善策などが書かれているか

前年度に引き続き、自己点検自己評価の妥当性を高めるため、自己点検自己評価の各項目について本人以外（各学部で選出）の複数名体制（表1-1）で形式面をチェックし、チェック事項の条件を満足しない場合は修正を依頼した。

表1-1 チェック体制

学部	体制	備考
外国語学部	学部評価委員+5名	
日本文化学部	学部評価委員+3名	+3名の中に学科主任を含む。
教育福祉学部	学部評価委員+1名	
看護学部	学部評価委員+5名	学部に自己点検評価委員会を組織。
情報科学部	学部評価委員+3名	
教養教育センター	センター長・副センター長	

第2章 自己点検・自己評価結果の概要

自己点検・自己評価のうち、研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献についての自己評価における達成度（十分達成／貢献、おおむね達成／貢献、達成／貢献できなかった）の割合を以下に示す。

1. 大学全体の達成度

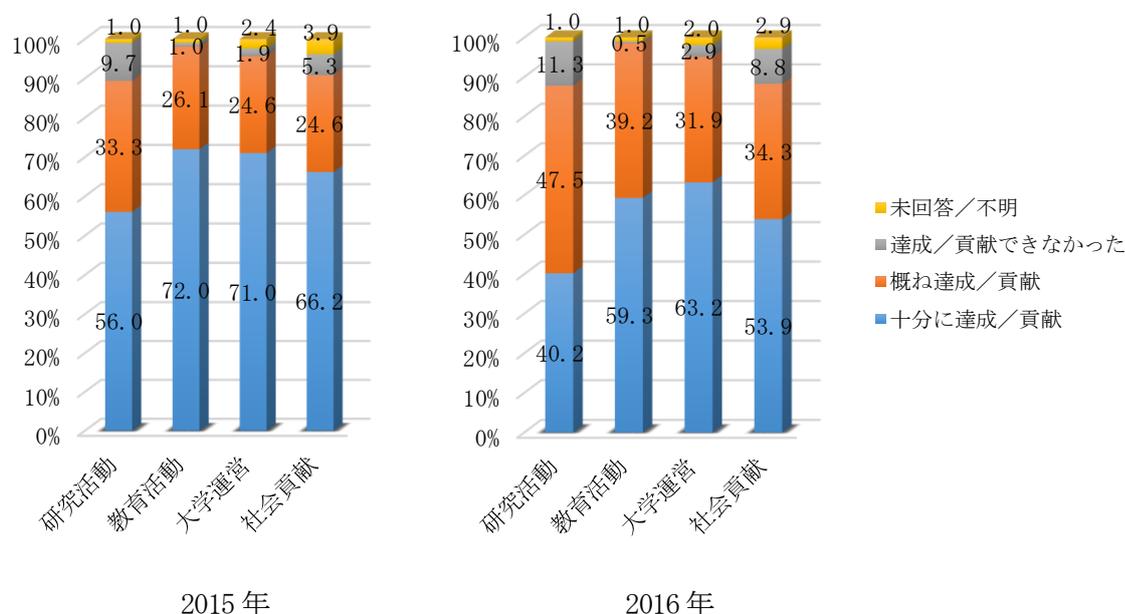


図2-1 達成度の割合（全体）

大学全体についてみると、「研究活動」「教育活動」「大学運営」「社会貢献」の4項目のうち、「十分に達成／貢献」または「概ね達成／貢献」と回答している割合が最も高かった項目は「教育活動」（98.5%）であり、僅差で「大学運営」（95.1%）が続く。ただし、「十分に達成／貢献」に限定すると、いずれの項目においても昨年度から低下しており、とくに「研究活動」では16ポイントの大幅低下となった。これは、事務的な書類の作成など、手続き的・外形的な作業に多くの時間・労力を割かざるをえず、ややもすると研究の蓄積・イノベーションに直接関わる活動が後回しになっていることの表れとみることができるとも思われる。もっとも、活動状況を「十分」「概ね」のいずれかに位置つけるか、あるいは「あまり達成／貢献できなかった」とするかは、各人の内にある目標と実現できたことの距離感を相対的に示すだけでなく、自己点検・自己評価という仕組みに対する教員の向き合い方に規定される部分が小さくないと思われる。学部によっても状況が異なるので、詳しくは各学部のページを参照されたい。

次に、各学部の概要を図2-2～図2-6に示す。

2. 外国語学部

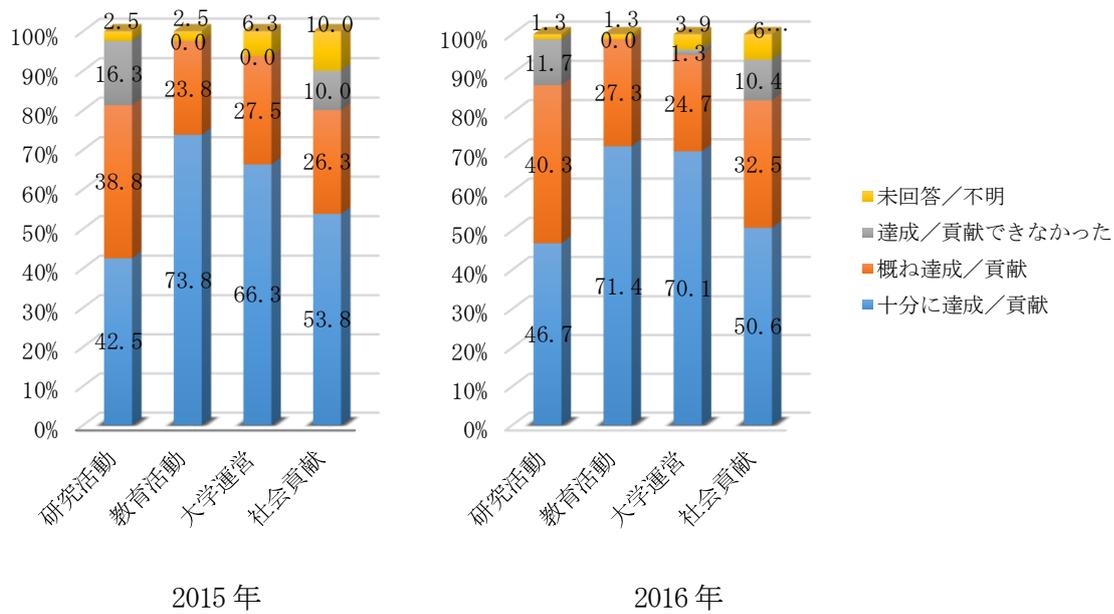


図2-2 達成度の割合 (外国語学部)

数年来の結果を通じて言えることは、教育活動の達成度が高い点である。これは、語学学習を中心とした諸地域研究を目指す本学部学生に対して、ときに個別的地道な対応を要求される指導が、満足感とともに実っていることを示しており、特筆すべき評価である。

それに反して、研究活動の項目での評価は相変わらず厳しいものとなっている。これは、分野によっては、研究結果が公刊論文の形となるのに必要とされる時間が1年ごとの自己評価報告に馴染まないことがあるためとも思われる。学内でも小規模な研究会や情報交換の場を設けるなどして、活性化の対策が望まれる。

3. 日本文化学部

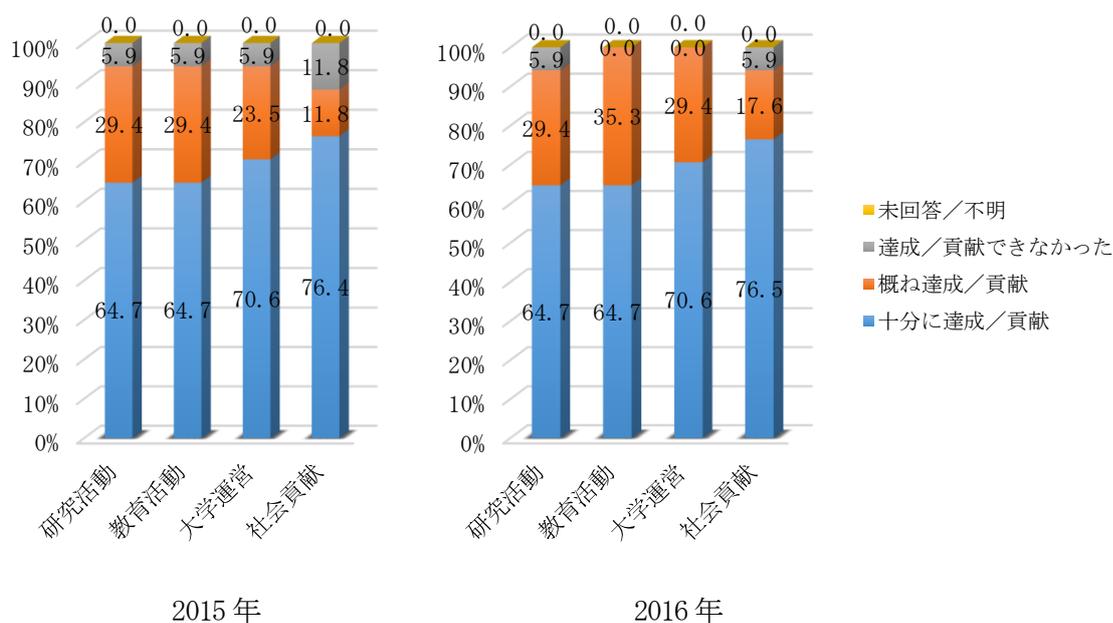


図2-3 達成度の割合（日本文化学部）

昨年度同様、4項目にわたって、学部教員の大半が「十分」または「概ね」達成できていると評価しており、ポイント数も各項目で昨年度と同じ高い数値を示している。それぞれの面で、昨年度に引き続き、高い達成度を示すような各教員の努力が払われている結果が表されていると考えられる。

「達成/貢献できなかった」と自己評価された個々の理由としては、「研究活動」において予定した著書が刊行できなかった、「社会貢献」において、経験不足のため社会への貢献ができなかった、が挙げられていた。

総体的に、大学運営・社会貢献等において、教員個人の負担過多の状況に置かれているなかで、研究・教育活動に最大限の力を注ごうとしている姿勢が窺える。個人的努力は限界状況にあると考えられ、体制やシステムとしての研究・教育活動を行いやすい環境の整備が望まれる。

4. 教育福祉学部

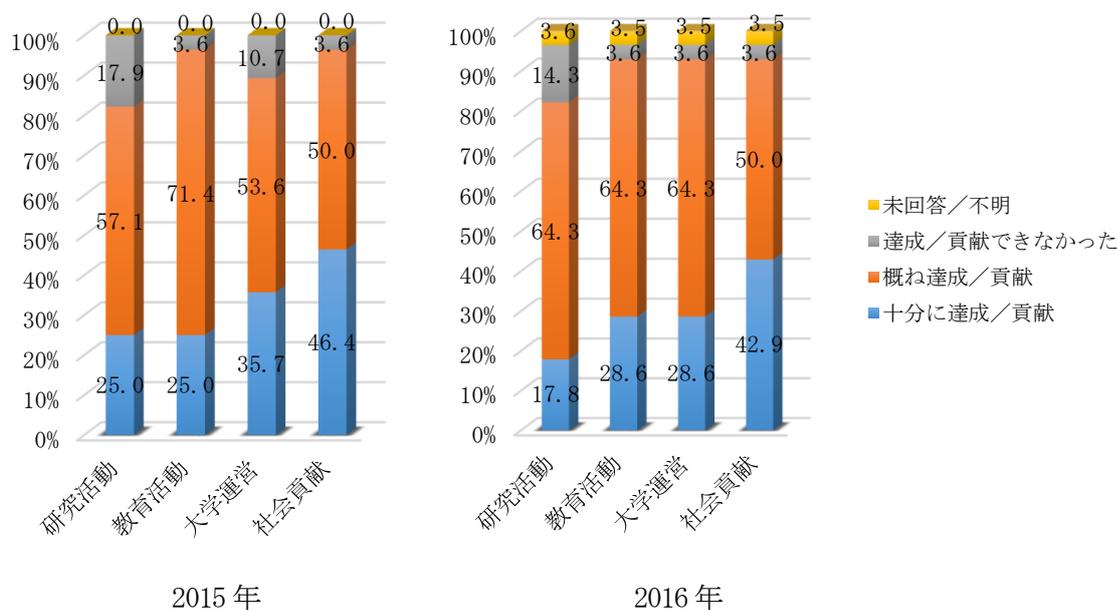


図2-4 達成度の割合 (教育福祉学部)

「十分に達成」「概ね達成」が大多数で圧倒的に多く、優れた評価となっている。個々の教員が自らの目標のもと、日々、努力をし、その成果を得ているので、このような評価が得られているのではないかと。より優れた研究・教育環境が得られれば（教育・研究費、教育・研究時間の保障、雑務の軽減）、個々の評価はさらに上がるものと思われる。

自己評価であるから評価基準は異なり、また、謙虚な性格ならば「十分に達成」とは自己評価しないであろうし、その辺りの差異もあると思われる。

それ以上に、注意すべきは、社会科学分野では新自由主義・構造改革後の目標—評価システムそのものが研究対象であり、これに対して批判的見地に立つならば（教育学では教員評価制度が教育現場を苦しめている、という研究成果は多い）、自らこの自己評価を積極的におこなうことはせず、つまり評価制度による包摂を避ける傾向が見られよう。「十分に達成」ばかりではないのは、そのような背景もあるのではないかと。

5. 看護学部

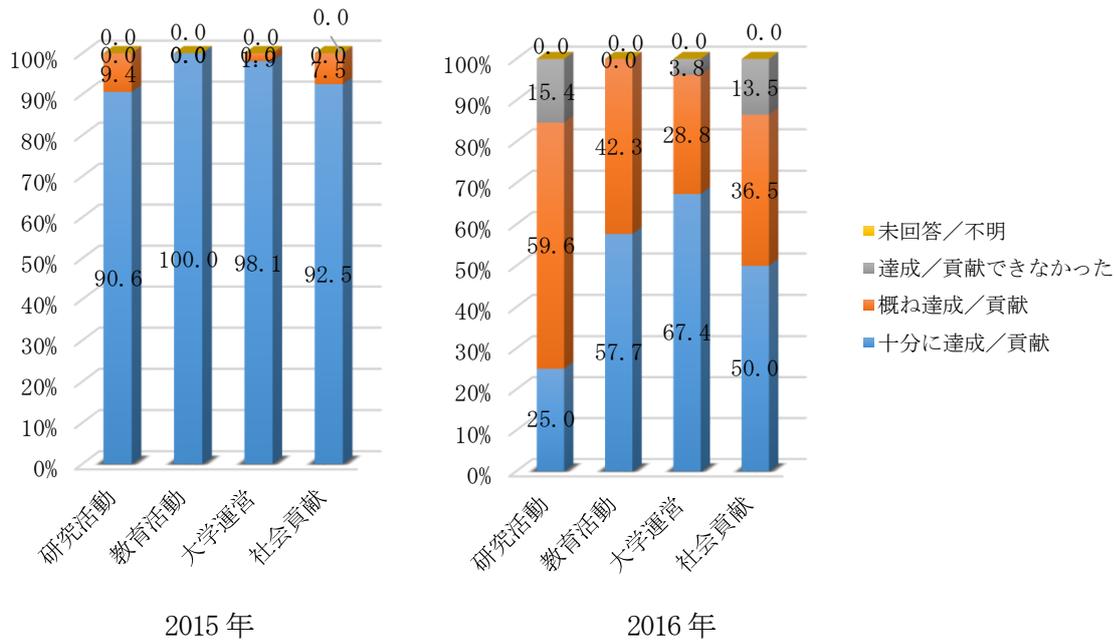


図2-5 達成度の割合（看護学部）

研究活動は、84.6%の教員が目標を十分に、あるいは概ね達成できたと評価しており、そのことは論文発表や学会発表等の記載内容からも十分に裏付けられる。達成できなかったと回答した教員についても、記載内容からみると自己の目標設定に対して若干の不足があったことに対して厳しい評価をしたと解釈できるため、看護学部としては活発な研究活動が行われて目標はほぼ達成できたと考えられる。

教育活動については、全員（100%）が十分に、あるいは概ね目標を達成できたと評価している。看護学部は必修の授業科目も多く、その他に多くの演習や実習指導が必要だが、全員が強い責任感と熱意をもって教育活動に取り組んだ結果と考えられる。

大学運営でも、ほぼ全員（96.2%）が目標を十分に、あるいは概ね達成できたと回答している。全教員が委員として何らかの委員会に所属し、活発に活動している結果と考えられる。

社会貢献では、86.5%の教員が十分に、あるいは概ね目標を達成できたと評価した。ほとんどの教員が学会運営、地域住民の健康増進活動、臨床看護師の研究支援等で活動している結果と考えられる。

これらの評価を総合すると、前年度と比べて目標達成度の数字はやや低下したが、平成28年度の看護学部は、研究、教育、大学運営、社会貢献の全般にわたって活発に活動し、ほぼ目標を達成できたと判断できる。

6. 情報科学部

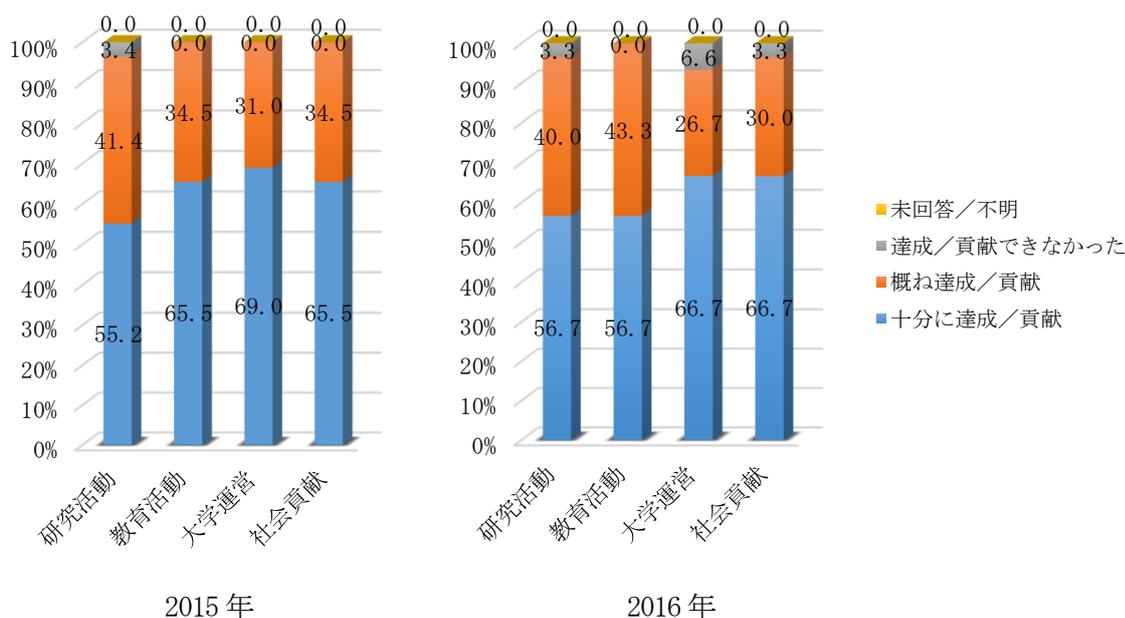


図2-6 達成度の割合 (情報科学部)

全体としては、「十分に達成/貢献」と「概ね達成/貢献」の割合を合計したものが「研究活動」、「教育活動」、「大学運営」、「社会貢献」ともそれぞれ9割以上(96.7%, 100%, 93.3%, 96.7%)で昨年と同程度あり、研究、教育、運営、社会貢献とも自ら過年度の成果・課題をふまえて立てた目標の達成に向け努力を継続しているといえる。項目別に見ても

研究活動では、「十分に達成/貢献」が56.7%で前年度55.2%、前々年度51.7%と少しずつではあるが増加傾向にあり、研究活動も目標達成に向け努力し、改善していることがわかる。

教育活動では、「十分に達成/貢献」が56.7%と学内運営よりは低い「あまり貢献/達成できなかった」は0%であり、目標達成に向け努力していることがわかる。

学内運営では、「十分に達成/貢献」が66.7%と一番高く、学内運営へ積極的に参加していることがわかる。

社会貢献では、「十分に達成/貢献」が66.7%と学内運営と同じであり、学外でも積極的に活動しているといえる。

7. 評価項目別実数

自己点検・自己評価の評価項目ごとの実数を表2-1（2015年度）及び表2-2（2016年度）に示す。

表2-1 2015年度のデータ
評価項目別の実数（大学全体）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	116	69	20	2
教育活動	149	54	2	2
大学運営	147	51	4	5
社会貢献	137	51	11	8

評価項目別の実数（外国語学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	34	31	13	2
教育活動	59	19	0	2
大学運営	53	22	0	5
社会貢献	43	21	8	8

評価項目別の実数（日本文化学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	11	5	1	0
教育活動	11	5	1	0
大学運営	12	4	1	0
社会貢献	13	2	2	0

評価項目別の実数（教育福祉学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	7	16	5	0
教育活動	7	20	1	0
大学運営	10	15	3	0
社会貢献	13	14	1	0

評価項目別の実数（看護学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	48	5	0	0
教育活動	53	0	0	0
大学運営	52	1	0	0
社会貢献	49	4	0	0

評価項目別の実数（情報科学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	16	12	1	0
教育活動	19	10	0	0
大学運営	20	9	0	0
社会貢献	19	10	0	0

表2-2 2016年度のデータ

評価項目別の実数（大学全体）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	82	97	23	2
教育活動	121	80	1	2
大学運営	129	65	6	4
社会貢献	110	70	18	6

評価項目別の実数（外国語学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	36	31	9	1
教育活動	55	21	0	1
大学運営	54	19	1	3
社会貢献	39	25	8	5

評価項目別の実数（日本文化学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	11	5	1	0
教育活動	11	6	0	0
大学運営	12	5	0	0
社会貢献	13	3	1	0

評価項目別の実数（教育福祉学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	5	18	4	1
教育活動	8	18	1	1
大学運営	8	18	1	1
社会貢献	12	14	1	1

評価項目別の実数（看護学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	13	31	8	0
教育活動	30	22	0	0
大学運営	35	15	2	0
社会貢献	26	19	7	0

評価項目別の実数（情報科学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	17	12	1	0
教育活動	17	13	0	0
大学運営	20	8	2	0
社会貢献	20	9	1	0

第3章 教員の自己点検・自己評価データ

(教員名簿、教員の自己点検・自己評価結果)

3. 1 外国語学部

●英米学科	
阿南 東也	○梶原 克教・・・・・・・・・・36
○池田 周・・・・・・・・・・18	○木全 滋・・・・・・・・・・38
○石原 寛・・・・・・・・・・20	○熊谷 吉治・・・・・・・・・・40
△アルゾ・ディビッド・ウエスト	○袖川 裕美・・・・・・・・・・42
○榎本 洋・・・・・・・・・・22	○中村 不二夫・・・・・・・・・・44
○エレノア・ロビンソン・山口・・・・・・・・24	○リチャード・マーク・ニクソン・・・・・・・・46
○デミエン・オオカドゴーフ・・・・・・・・26	○クリストファー・ハーウッド・・・・・・・・48
○大野 誠・・・・・・・・・・28	○久田 由佳子・・・・・・・・・・50
○大森 裕實・・・・・・・・・・30	○広瀬 恵子・・・・・・・・・・52
○奥田 泰広・・・・・・・・・・32	○松本 三枝子・・・・・・・・・・54
○小澤 正人・・・・・・・・・・34	○村山 瑞穂・・・・・・・・・・56
△ワキーン・エマニュエル・カステヤーノ	○森田 久司・・・・・・・・・・58
●ヨーロッパ学科 フランス語圏専攻	
○天野 知恵子・・・・・・・・・・62	○中田 晋自・・・・・・・・・・72
○アンヌ＝クレール・カシウス・・・・・・・・64	○長沼 圭一・・・・・・・・・・74
○伊藤 滋夫・・・・・・・・・・66	○原 潮巳・・・・・・・・・・76
○岸本 聖子・・・・・・・・・・68	○フランク・モラル・・・・・・・・・・78
○佐藤 久美子・・・・・・・・・・70	○野内 美子・・・・・・・・・・80
●ヨーロッパ学科 スペイン語圏専攻	
○糸魚川 美樹・・・・・・・・・・84	○田中 敬一・・・・・・・・・・94
○江澤 照美・・・・・・・・・・86	○谷口 智子・・・・・・・・・・96
○奥野 良知・・・・・・・・・・88	○マリア・デル・カレン・ルデス・サトス・・・・・・・・98
○小池 康弘・・・・・・・・・・90	○リディア・サラ・・・・・・・・・・100
○竹中 克行・・・・・・・・・・92	○渡会 環・・・・・・・・・・102
●ヨーロッパ学科 ドイツ語圏専攻	
○池田 利昭・・・・・・・・・・106	○平井 守・・・・・・・・・・116
○今野 元・・・・・・・・・・108	○ザシャ・モンホフ・・・・・・・・・・118
○櫻井 健・・・・・・・・・・110	○山本 順子・・・・・・・・・・120
△杉原 周治	○ヤン・ゲリット・シュトラーラ・・・・・・・・122
○中屋 宏隆・・・・・・・・・・112	○四ツ谷 亮子・・・・・・・・・・124
○人見 明宏・・・・・・・・・・114	
●中国学科	
○王 幼敏・・・・・・・・・・128	○孫 徳坤・・・・・・・・・・140
○川尻 文彦・・・・・・・・・・130	○月田 尚美・・・・・・・・・・142
○工藤 貴正・・・・・・・・・・132	○中西 千香・・・・・・・・・・144
○黄 東蘭・・・・・・・・・・134	○西野 真由・・・・・・・・・・146
○小座野 八光・・・・・・・・・・136	○吉池 孝一・・・・・・・・・・148
○鈴木 隆・・・・・・・・・・138	

●国際関係学科	
○秋田 貴美子・・・・・・・・・・152	○高橋 慶治・・・・・・・・・・166
○東 弘子・・・・・・・・・・154	○半谷 史郎・・・・・・・・・・168
○鶴殿 悦子・・・・・・・・・・156	○福岡 千珠・・・・・・・・・・170
○亀井 伸孝・・・・・・・・・・158	○藤倉 哲郎・・・・・・・・・・172
○木下 郁夫・・・・・・・・・・160	○宮谷 敦美・・・・・・・・・・174
○草野 昭一・・・・・・・・・・162	○矢野 順子・・・・・・・・・・176
○高阪 香津美・・・・・・・・・・164	○エドガー・ライト・ポープ・・・・・・・・178
●多文化共生研究所	
杉山 三郎	

○：提出、△：長期出張、長期休暇、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

3. 2 日本文化学部

●国語国文学科	●歴史文化学科
○伊藤 伸江・・・・・・・・・・184	○井戸 聡・・・・・・・・・・204
○大野 出・・・・・・・・・・186	○大塚 英二・・・・・・・・・・206
○久富木原 玲・・・・・・・・・・188	○上川 通夫・・・・・・・・・・208
○久保蘭 愛・・・・・・・・・・190	○川畑 博昭・・・・・・・・・・210
○中根 千絵・・・・・・・・・・192	○中島 茂・・・・・・・・・・212
○福沢 将樹・・・・・・・・・・194	○服部 亜由未・・・・・・・・・・214
○三宅 宏幸・・・・・・・・・・196	○樋口 浩造・・・・・・・・・・216
○宮崎 真素美・・・・・・・・・・198	○丸山 裕美子・・・・・・・・・・218
○若松 伸哉・・・・・・・・・・200	△與那覇 潤

○：提出、△：長期出張、長期休暇、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

3. 3 教育福祉学部

●教育発達学科	●社会福祉学科
○伊藤 稔明・・・・・・・・・・224	○宇都宮 みのり・・・・・・・・・・256
○稲嶋 修一郎・・・・・・・・・・226	○大賀 有記・・・・・・・・・・258
○内田 純一・・・・・・・・・・228	○田川 佳代子・・・・・・・・・・260
○葛西 耕介・・・・・・・・・・230	○湯 海鵬・・・・・・・・・・262
○久保田 貢・・・・・・・・・・232	○中尾 友紀・・・・・・・・・・264
○瀬野 由衣・・・・・・・・・・234	○中藤 淳・・・・・・・・・・266
○高橋 範行・・・・・・・・・・236	○野田 博也・・・・・・・・・・268
○田村 佳子・・・・・・・・・・238	○橋本 明・・・・・・・・・・270
○藤原 智也・・・・・・・・・・240	○松宮 朝・・・・・・・・・・272
○堀尾 良弘・・・・・・・・・・242	○村田 一昭・・・・・・・・・・274
○丸山 真司・・・・・・・・・・244	○山本 かほり・・・・・・・・・・276
○三山 岳・・・・・・・・・・246	○吉川 雅博・・・・・・・・・・278
○望月 彰・・・・・・・・・・248	○渡邊 かおり・・・・・・・・・・280
○山本 理絵・・・・・・・・・・250	
○渡邊 眞依子・・・・・・・・・・252	

○：提出、△：長期出張、長期休暇、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

3. 4 看護学部

●看護学科	
○天木 伸子	286
○天草 百合江	288
○石光 芙美子	290
○牛島 佳代	292
○宇城 令	294
○益 加代子	296
○大原 良子	298
○岡田 悦政	300
○緒方 京	302
○岡本 和士	304
○荻 あや子	306
○鬼塚 知里	308
○尾沼 奈緒美	310
○籠 玲子	312
○賀沢 弥貴	314
○糟谷 久美子	316
○片岡 純	318
○片岡 由美子	320
○片平 正人	322
○神谷 摂子	324
○汲田 明美	326
○黒川 景	328
○小松 万喜子	330
○佐藤 美紀	332
○柴 邦代	334
○清水 宣明	336
○下 睦子	338
○下園 美保子	340
○杉山 希美	342
○曾田 陽子	344
○田上 恭子	346
○戸田 由美子	348
○中戸川 早苗	350
○西尾 亜理砂	352
○西岡 裕子	354
○西脇 可織	356
○服部 淳子	358
○馬場 美幸	360
○平野 明美	362
○広瀬 会里	364
○深田 順子	366
○藤野 あゆみ	368
○古田 加代子	370
○松岡 広子	372
○箕浦 哲嗣	374
○百瀬 由美子	376
○柳澤 理子	378
○山田 浩雅	380
○横山 加奈	382
○米川 美那	384
○米田 雅彦	386
○渡邊 直美	388

○：提出、△：長期出張、長期休暇、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

3. 5 情報科学部

●情報科学科	
○伊藤 正英	394
○入部 百合絵	396
○臼田 毅	398
○大久保 弘崇	400
○太田 淳	402
○奥田 隆史	404
○小栗 宏次	406
○何 立風	408
○粕谷 英人	410
○金森 康和	412
○神谷 直希	414
○神谷 幸宏	416
○神山 斉己	418
○河中 治樹	420
○小林 邦和	422
○作村 諭一	424
○代田 健二	426
○鈴木 拓央	428
○田浦 俊明	430
○田坂 浩二	432
○辻 孝吉	434
○田 学軍	436
○戸田 尚宏	438
○永井 昌寛	440
○成瀬 正	442
○平尾 将剛	444
○村上 和人	446
○山村 毅	448
○山本 晋一郎	450
○吉岡 博貴	452

○：提出、△：長期出張、長期休暇、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

3. 6 入試・学生支援センター

●国際交流室	
○桑村 昭・・・・・・・・・・・・・・・・458	

○：提出、△：長期出張、長期休暇、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

3. 7 教養教育センター

●教養教育センター	
○アリン ロジャー・・・・・・・・・・464	○アリソン・カース・・・・・・・・・・468
○アンドレア カールソン・・・・・・・・・・466	○松井 ヘイアブリル・・・・・・・・・・470

○：提出、△：長期出張、長期休暇、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

おわりに

本学の自己点検・自己評価報告書作成は、平成18年度に始まった。それから10年以上が経った現在の課題は、教員個人が1年間の仕事を総括し、次の年に向けての抱負を確認するために、報告書作成の機会をいかしてもらふことにほぼ尽きると考えている。

以下、今年度の評価委員会で合意したこと、提起された主な意見をまとめることで、委員長としての締め括りとする（すでに定型化した委員会活動に関する審議事項は除く）。

【合意事項】

■自己点検・自己評価を教員のリフレクションに繋げる方法について、昨年度に引き続き議論した。結論として、評価委員長から全教員に対して報告書作成を依頼するさいに、昨年度の自己点検・自己評価結果をふまえて次年度の目標設定を行い、設定した目標を参照しながら当該年度の自己点検・自己評価を行ってもらふよう、教員の意識喚起を行うこととした。併せて、自己点検・自己評価報告書冊子に記載される学部選出評価委員会の所感では、過年度の成果・課題をふまえた取組みが行われたかどうかについて、学部の全般的状況を考慮したコメントを盛り込んでもらうことを合意した。

■本学ウェブサイトの学内専用ページの廃止に伴い、自己点検・自己評価報告書の学内向けの公表は、法人教職員閲覧用ウェブサイトを集約することとした。

【主な意見】

■自己点検・自己評価に関するフィードバックループの方法論を検討すべきではないか。

■教員個人のPDCAサイクルが回っているかどうかを確認する必要はないか。

■自己点検・自己評価それ自体がリフレクティブな性格を有する。その内容について委員会が監視を強化することは適切であろうか。

■大学の教育研究において、毎年新しい目標を掲げることを目的化するのは妥当であろうか。

平成28年度評価委員会委員名簿

	学部等	委員名
学部選出の教育研究審議会委員	外国語学部	竹中 克行 (委員長)
	日本文化学部	久富木原 玲
	教育福祉学部	湯 海鵬
	看護学部	片岡 純
	情報科学部	戸田 尚宏
各学部選出委員	外国語学部	山本 順子
	日本文化学部	井戸 聡
	教育福祉学部	久保田 貢
	看護学部	清水 宣明
	情報科学部	辻 孝吉
事務部門長		若子 直
オブザーバー	副学長	神山 斉己

愛知県立大学
教員の自己点検・自己評価
— 自己点検・自己評価報告書 —

平成29年3月発行

編集・発行
愛知県立大学 教育研究審議会 評価委員会

〒480-1198 (個別番号)
愛知県長久手市茨ヶ廻間1522番3

TEL 0561-64-1115
FAX 0561-64-1101
E-mail soumuka@puc.aichi-pu.ac.jp